
緋色の満月

ぼくつくえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の満月

【Nコード】

N1997R

【作者名】

ぼくつくえ

【あらすじ】

普通の高校生、新庄七代しんじょう ななよは勘がいいこと以外はほとんど取り柄のない少年。

しかしある日突然奇妙な生物、オーダーに出会った。

オーダーはいきなり救世主など、理解できないことを話はじめた。

これは七代とオーダーの異世界に行ったり行かなかったりする物語

である・・・

ブローグ 「日常の終わり」

俺は屋上で授業をサボって寝ていた。ふと目を覚ますと雲一つないような空が広がっている。

ザワザワと木々が揺れる音がしているが、風が強いわけではなくむしろ心地いいくらいだ

ああ……今日もいい天気だ、なんて思っていると空に穴が開いている。

空に………あな？

「いやいやいや！ありえないだろ！いかん、寝ぼけてるのか！」

そう思わないと許容できないくらいありえないもので………そして、なにか心に響くものがあつた。

中は真つ暗でところどころに光るものがあり、奥の方にほとんど見えないが森のようなものが広がっている。

俺は自然と、届かないとわかつているのに手を伸ばしていた。

ピチャツ「ヘッ？」

触れた瞬間悪寒が走り、すぐに手を離した。

今穴の中からなにか黒い影が見えたような？気のせいk「うわああああ……！」「うおっ！」

ポフッ！

・・・・・・・・何か変な生き物が落ちてきた。

「やあ、救世主！僕の名前はオーダー！これからヨロシク！」

「いやいやいや、いきなり現れて何をいつているんだお前は、だいたい救世主ってなんだこれからもなにも俺は「まあまあ！ちゃんと説明はするから落ち着けて！」」

いきなり現れてコイツは何様のつもりだ。

・・・・・・・・これが俺とコイツ、「オーダー」との出会いで信じられないことの始まりだった。

ブローグ 「日常の終わり」 (後書き)

意見や誤字脱字等があれば言ってもらえれば幸いです。

一話目 「突然の英雄任命」 (前書き)

実は設定とか作って無いんで、説明不足ばっかなので。あれ？っと思っことしかないと思います。

それと後半がまともじゃないです。深夜のテンションで書いた結果がこれだよ！

とりあえずご注意を。

一話目 「突然の英雄任命」

やあ！おれのなまえはしんじょうななよ！いたってふつづのこつこ
うせいだよ！

いまおれは……「おい七代？聞してるのー？」

なぜか馬車に乗っています。

「あー……聞してるよ。半分位。」

「半分じゃ聞いてないのと変わりないよ！」

どうしてこんなことになったんだろう。

俺は普通に居眠りしてただけのはずだ、なんにも悪いことは……授業
をサボっていたぐらいだ。

「なーなーよ！ー！ちゃんと話聞いて！」

「うつせえな、どうせココの説明だろ？だいたい分かったよ、だから
元の世界に戻せ。」

そう、俺は今日本どころか地球でもない異世界に来ている。

なんでこんなことになったのか自分でもわからない。が、一つ言え
ることは……

オーダー（コイツ）ウゼエ！ー！

「それはできないよ、だって七代にはこの世界を救ってもらわないといけないからね！」

「だからなんでなんだよ！いきなりやってきてこの世界だの救世主だのって、意味わかんねえよ！」

「だからそれを説明しているじゃないか！！」

「…チツ わかったよ、じゃあわかりやすく完結に三行で言え。」

「七代は実は、とっても偉い神様の生まれ変わりで、色々な奇跡が起こせるんだよ！」

その奇跡を使って重大な危機が迫っているこの世界を救わせるために、世界の意思で

すごくてすごい僕が七代を呼んでくることになったんだ、やっぱり僕はすごいね！」

（よくわかんねえし最後はお前がすごいって自分でいってるだけじゃねえか！）

「わかった？」

「ここも空は青いんだな……」

「あーもう！やっぱり聞いてないじゃないか！七代の嘘もモガッ！」

俺は横でうるさくしているオーダーを黙らせた。

ふう…とりあえず状況を整理しよう。

まずコイツの話が本当だとするとここは異世界らしい。

確かに周りにはビルも車もなく、とにかく広い草原に道があるくらいだ。

人もほとんど通っていない、というかここにきて誰とも会っていない。住人とかいるんだろうか？

次に、信じられないが俺は神様の生まれ変わりで色々な奇跡が起こせるということらしい。

もしそれが本当ならば、俺以外にも他に神様の生まれ変わりはいるのだろうか？

そもそも、宗教の違いで神様の概念が曖昧だから矛盾が生まれたりするんじゃない？

…別にそれはいいか。オーダーの言っていた世界の意思是、なぜ俺をこの世界に呼んだんだ？

いったいこの世界に何があるのだろうか。俺は元の世界に戻るのか？「もどれるよ？」「へっ？」

あつ、無意識に口ふさぐのやめちゃった。

そうじゃなくて！今なんつた？こいつ。…………もどれる？

「うん！こっち来ることが出来るのだから向こうにもいけるに決まっているじゃないか。」

なにが決まってるんだろうか。ん？ちよつとまで。今コイツ……

「お前、なんで俺の考えてることが分かったんだ？返答次第ではただじゃおかねえぞ？」

もし心が読めるんだとしたら、怖くて何も考えることが出来なくなるからな。

「そ、そんなわけないじゃないか！まったく、自分が声に出してなんて怒られなきゃいけないのさ！」

「ああ、声に出てたのか。それは悪かった、八朔1個分くらい謝ってやるから許せ。」

「なにその謝り方。というかハツサクってなに？」・・・この世界の食べ物地球とは違うのか。

「でかい蜜柑みたいなもんだ、ほれ。」

ヒュッ

「うわっ！」

俺は鞆から八朔を取り出しオーダーに投げた。

「食べてみるよ、美味いから。」

自慢じゃないが、これは俺の家で採れたものだ。俺はいつもこれを昼食後のデザートにしたりする。

「へえー。いい匂いだね。」

オーダーはそういいながら、俺の手渡したそれを見て、嗅いで、そして【そのまま】齧りついた。

「まてまてまてまて！皮と一緒に食べるんじゃない！それは皮を剥いて食べるものだって！」

俺の言葉を見捨て、一心不乱に齧りついている。

「ぶはあ！」

やれやれ、ようやく顔をあげたか。『どうだ苦かっただろ。』とでも言ってるかな。と思っっていると。

「七代！」 「ん、なんだ？ 苦かったか？」

突然顔を上げたと思うと、俺の名前を呼んだ。俺はさっき考えていたことを言ったが、予想外の答えを返されてしまった。

「八朔って美味しいね！ 僕の美味しいものランキングの上位に入るくらいだよ！」

（あれー？ なんで平気なんだ？）

おれは、こいつのしたとあたまといがしんぱいになりました。

いやそうじゃなくてだな、子供のころにみんな一度はやったことがあるだろうが、蜜柑など柑橘類の皮はとても苦いので普段食べることなど滅多にないようなものだ。

それをおいしいなんて、苦いもの好きかよっほどの味オンチか通かだ。

つまりだな。言いたいのは、この世界の住人がみんなこいつのような舌だとしたら。当然出てくる料理の味付けも・・・。

「この世界の食べ物心配になってきた…」

「なにか言った？」

「いやなにも。ハア…」

俺はさっきオーダーの言っていた「帰ることができる。」という言葉に安心し、馬車のなかで少し眠ることにした。

一話目 「突然の英雄任命」(後書き)

はい。えーっと、自分でも何を書いたのかよくわかりません。

後半のいきなりのギャグっぱいのとかほんと……なんなんでしょうね！

とりあえず七代君が日本から異世界に来ました。

オーダーは異世界から日本へきて異世界にもどりました。

オーダーの設定や姿などは後々考えていきます(オイ

それでは、お読みいただきありがとうございますー！

読んでくれる人いないと思いますけどねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1997r/>

緋色の満月

2011年10月8日19時39分発行